



鈴鹿王者、三宅淳詞選手が日本一決定戦を制す

2018年の「スーパー FJ & F4日本一決定戦」は、ツインリンクもてぎを舞台に、12月16日に開催された。スーパー FJには32台がエントリー。例年通り、予選、第1レグは2グループに分けられた。

Aグループでは鈴鹿チャンピオンの三宅淳詞選手が一人、2分3秒台に乗せ、「最後にしっかりタイヤを温められて、狙っていた通りのタイムが出ました」と、ポールポジションを獲得。これに0.1秒差で、もてぎチャンピオンの神晴也選手が続いた。第1レグでは、その二人が激しくトップを争い、最終ラップは3回も順位を入れ替えた末に神選手がトップチェッカー。「久々にバトルができて、しかもうまくいった良かったです」と、ここまで挙げた勝利はすべて独走だったこともあり、満足そうな表情を見せた。二人に遅れず澤龍之介選手が続いたが、順位を入れ替えるまでには至らなかった。

Bグループでは筑波で2連覇の大竹将光選手が、2番手の上田裕也選手を予選で0.8秒も離れた勢いそのままに、第1レグを独走。しかし、ゴールタイムではAグループが先着したため、アウト側グリッドを明け渡すも、「まだまだ狙えるチャンスはあると思いますし、得意なスタートを決めて、ファイナルで前に出られた

らしいですね」と意欲を見せた。2位は上田選手との激戦の末に、徳升広平選手が獲得した。

10周で争われるファイナルでは、ポールポジションの神選手がスタートで出遅れる波乱が。しかし、波乱はこれに留まらなかった。神選手は2周目には2番手に上がり、スタートでトップに躍り出た三宅選手に続いたものの、4周目の4コーナーで痛恨のスピン。しかも、後続車両との接触でノーズを痛め、コース脇にストップしたのだ！。その後、神選手のマシンを回収するため2周にわたってセーフティカー(SC)が入り、一気に差を詰めて2番手に浮上した大竹選手、3番手の澤選手にはビッグチャンス到来かと思われた。だが、三宅選手は一枚上手だった。リスタートを完璧に決めて、逆に後続を引き離すことに成功したのだ。

「SCの後は(併せて受講した)SRS-Fで練習させてもらっているの、それが活かしました。スタートで前に出られて、その後も追いつかれることなく行けたので、良かったです」と語る三宅選手が、S-FJ日本一の座に就いた。

2位は「SCでうまくやられちゃったというか、そこを突いていければ、また違っていたかもしれません。で

も、これが実力ということ、まだレベルアップする余地があるんだと、前向きにやっていきたいと思います」と語る大竹選手が獲得。3位の澤選手は、「鈴鹿の最終戦でマシンが大破して、フレーム交換をしたんですが、セットアップが完全でなく、自分のミスが多くて噛み合わなかった」と語るが、17年の全日本カートFS-125チャンピオンは、まだ16歳。新たなシーズンの大躍進が期待できそうだ。

一方、F4は完全に太田格之進選手のひとり舞台だった。フル参戦できず、あと一歩のところまで西日本シリーズのチャンピオンは逃したものの、実力を遺憾なく発揮。凍てつくほどの寒さだった早朝の予選では、2番手を3秒近く引き離し、続くセミファイナルでは8周で約15秒



S-FJ表彰台獲得の(左から)2位大竹、優勝三宅、3位澤の3選手。



S-FJ / 1. 優勝の三宅選手はSRS-Fのスカラシップを受け、2019年はFIA-F4に参戦する。**2.** 35歳以上のドライバーを対象としたレジェンド賞受賞の(左から)2位HIROSHI、優勝吉田宣弘、3位山浦資智の3選手。**3.** 鈴鹿を主戦場とした澤龍之介選手が3位に入った。**4.** 筑波チャンピオンの大竹将光選手が2番手に入った。**5.** 岩澤優吾選手は6位。**6.** 5位は上田裕也選手。**7.** 4位に入った荒川麟選手。



F4 / 8. 太田達也選手は2位に入賞した。**9.** 鳥倉世名選手は3位に食い込んだ。**10.** 4位でゴールは佐藤セルゲイビッチ選手。**11.** 西日本チャンピオンの久保宣夫選手が5位に。**12.** 小倉可光選手は6位。**13.** F4は西日本シリーズで圧倒的な速さを見せ付けた太田格之進選手が快走を見せて優勝を飾った。**14.** Hクラス優勝の早坂公希選手。**15.** F4表彰台獲得の(左から)2位太田(達)、優勝太田(格)、3位鳥倉の3選手。



差の圧勝に。2位は「ニュータイヤの合わせ込みがうまくいかず」、予選4番手に甘んじていた太田達也選手が獲得した。06年からF4に挑んで、悲願の初戴冠となった西日本チャンピオンの久保宣夫選手は、意外にもF4でもてぎは初走行。予選6番手から好スタートを切るも、姿

勢を乱した車両を回避しようとして7番手まで順位を落とす。その後、先行する車両のガードが固く、5着でのゴールが精一杯だった。

15周で争われるファイナルは、PPの太田格之進選手が出遅れ、太田達也選手の先行を許したものの、3周目の4コーナーでクロスをかけ、早々に逆転に成功。その後、必死の抵抗を見せた太田達也選手だったが、徐々に引き離され、8秒差の2位。しかし、「乗って2戦目のマシンですから」と太田達也選手は納得の様子を見せた。

F4日本一に輝いた太田格之進選手は「スタートは苦手なんです(苦笑)、抜き返してからは、ちゃんと逃げる事ができました。1年間の集大成を飾れたのは、成長させてもらったミストさんのおかげです」と感謝の念を欠かさず。

3位の鳥倉世名選手は、セミファイナルのスタート手順違反で、ペナルティで順位を落とし、ファイナルは11番手から臨みながら、ポジションを上げてきた。一方、久保選手はせっかくの好スタートをまたも活かせず。抜き所に苦慮したまま、無念の7位に甘んじた。Hクラスの優勝は総合7位の早坂公希選手が獲得した。

なお、ウィークデーの練習で大怪我を負い、出場できなかった東日本チャンピオンの金井亮忠選手は、応援にサーキットを訪れていたほど回復していたことを最後に伝えておこう。



FTT1.5 / 16. 塩谷烈州選手は3位に入った。**17.** 2位入賞のヒロポン選手。**18.** 東西に分かれて開催されるFTT1.5チャレンジカップの上位勢が競った一戦は鈴鹿シリーズを追う伊藤裕士選手が優勝。**19.** 表彰台獲得の(左から)2位ヒロポン、優勝伊藤、3位塩谷の3選手。